

# 三重県山岳連盟報告

第六号



1954

三重県山岳連盟報告

第六号



1924

三重県山岳連盟報告

— 第 6 号 —



目 次

三重県山岳連盟加盟団体 .....	2
斜里岳と昭和新山 .....	北勢山歩会 山口温夫 3
鈴鹿のむかし .....	松阪山岳会 山口政一 9
若山五郎君の死を悼む .....	伊達忠雄 11
前穂高岳東壁譚雅報告書 .....	岩 稜 会 沢田栄介 13
岳 連 ソ ー ト .....	20
山 行 記 録 .....	22

### 三重県山岳連盟加盟団体

(五十音順)

- ▷ 睡学園鈴峯山岳部
- ▷ 員弁高等学校山岳部
- ▷ 伊勢山岳会
- ▷ 宇治山田高等学校山岳部
- ▷ 宇治山田商工高等学校山岳部
- ▷ 岩嶺会
- ▷ 神戸高等学校山岳部
- ▷ 龜山高等学校山岳部
- ▷ 河原田高等学校山岳部
- ▷ 桑名高等学校山岳部
- ▷ 吳羽紡績鈴鹿工場山岳部
- ▷ 白子高等学校山岳部
- ▷ 鈴鹿市体育協会山岳部
- ▷ 鈴鹿アルパインクラブ
- ▷ 中部配電津支店山岳部
- ▷ 津高等学校山岳部
- ▷ 津工業高等学校山岳部
- ▷ 津峠の会
- ▷ 東亜紡織泊山工場山岳部
- ▷ 東亜紡織桶工場山岳部
- ▷ 東洋ペーピング山岳部
- ▷ 名張高等学校山岳部
- ▷ 松阪山岳会
- ▷ 松阪商業高等学校山岳部
- ▷ 松阪高等学校山岳部
- ▷ 三重芝浦山岳部
- ▷ 三重大学農学部山岳会
- ▷ 三重県立医大山岳部
- ▷ 山田山岳俱樂部
- ▷ 四日市山岳スキー協会
- ▷ 四日市高等学校山岳部
- ▷ 四日市商工高等学校山岳部
- ▷ 北勢山歩会

## 斜里岳と昭和新山

北勢山歩会 山口温夫

才九回国民体育大会山岳部門に参加して、大雪火山群を訪れた機会を利用して、一ヶ月にわたって、北海道の山々を見て来たが、大雪山と、十勝岳を除いては、いずれも二十千米以下で、中部山岳とは比較にならないもので、極言すれば、鈴鹿級のものばかりである。之の中で、特に印象に残ったものは大雪火山群と、斜里岳、昭和新山である。

大雪火山群については、詳しい記録もあるだろうから、北海道ならでは見ることの出来ない斜里岳と昭和新山について書いてみよう。

### ▲斜里岳▲

細道を登った列車は、オホーツク海を左に、トウフツ沼を右に見て、天然花園として、道立公園に指定されている砂丘を走りつづける。どの家でも真夏だというのにストーブを焚いていた程寒く、荒れて灰色をしてしたオホーツク海も、今日はまた、見事に凧いで、午後の日を受けて輝き、トウフツの沼辺に遊ぶ馬の群は、或は浅く水に入り、或は草を喰んで短い夏の陽光を存分に浴びている。

列車の前方をくぐる山脈が次第に近くなって来た。丘前方には、オホーツク海を劃して、知床半島のが、知床岳(1255米)、硫黄岳(1580米)、羅白岳(1661米)と並び、車の右前方へ、斜里岳(1545米)が大きく現れ、標別岳は僅かに肩に雲を担って雁行している。列車の前方は、梅別岳らしい。空いた車内を右に左に移動しながら、あがずに眺める。乗り合えた斜里の人に尋ねると、「ウトロ岬まではどうにか行かれるが、之の先は途がなく、船も接岸出来ず、ただ、半島を廻るだけなら、船を頼めば、廻れないことはないが」との返事なので、有名な硫黄の流れのある硫黄岳は訪れられようもない。どれかには登りたいのだがと言ったら、斜里岳を紹介してくれて、「戦時中、兵隊がいて登路があったが、今でも登山者があるので途はありているが、熊に注意しなさいよ」とおどかされて、上斜里駅で下車すればよいときいた。斜里駅で海岸と別れ、列車は斜里岳の麓に展開する牧野をぬって走る。斜里岳は死火山で、侵蝕が進み、満壮年期のコニーデで、頂上は数基に分

れている。すっぽりと海中に沈めると、利尻島を形成している利尻岳と似ている。斜里岳が後方に廻ったと思われる位置で上斜里駅へついた。

宿の主人はさすがに詳しかった。「私は行ったことはありませんが、近頃は登山者も多いから大丈夫ですよ。バスで江鷹まで行き、左へ折れて、学校を石に見て進み、つきあたると部落があり、此処が登山口ですから、土地の人に聞きなさい。頂上にも泊る所もあり、たいてい二日で行きますが、日帰りも出来ます」と教えてくれた。

地下足袋を送ってしまったので、ズック靴を求めて、サフで日帰りと決めた。バスを捨てて左へ曲り、直線の砂ぼこりの道を歩く。屈斜路カルテラの最高峰藻琴山を後に、斜里岳を右前方に眺めて、三分から、五分もつづく広い畑を、ここは夏、ここはヒード、隣は馬鈴薯畑とメモをとりながら進み、チエサクエトピ川を渡って部落に入る。新開地なので、焼畑農法で造成したばかりの耕地が多く、墓地のように、大木の幹が林立していた。部落の外れの小川にしつらえられた水汲み場で、水筒に水をつめ、ミルクの罐を冷やしていたら「斜里岳へ登りなさいのか、こちらから行きなさい。先日も学生さんが向進えて、林道の方へ行き、わしが尾たので、引返して貰ってよかったが絶対に行けんから」と、樺太から引揚げたという老人が教えてくれた。(後日、弟が訪れたとき、迷って一日中ひどい目に遭った。

斜里岳に入るたぐ一本の道だけに相当に踏れている。樹相は違いが、富士山の北麓、青木ヶ原の原生林をゆくのと似ていて、鳥の声はあるが、展望は全然きかない。一合目とか、二合目とかエゾ松の幹を削いで書かれ、休むように作られた喫煙の場所が与えられてあった。途中で二人の学生が下山してくるのに会った。この分でゆくと、いつ裾野が終るのかと思われる頃流れに出た。ここで、これから上るのだという江鷹の小学校の先生二人に会った。今日は頂上で泊り、御来光を拜んでから帰るのだとの事だったが、道が判らぬと困るので、同行することとした。土地の学校の先生だけあって詳しく兵隊のいた頃のことを知っていて、戦争時代の話や、饑餓のことなど聞きながら澤をつめていった。何々洞とも名付く可き藪まほり穴や、岩場の下を滑る所もあった。少し湿っほいか、絶好の泊り場となる。

川の岩はソフがついた様に、一面に赤茶けており、苔もよくついでいて、よく滑った。この川の水には毒があるから、飲めないが、もう少し上流で二つに岐れていて、支流の水はとていい水であるから、暫く休憩しなさいと教えてくれた。

暫く行くと、果して、赤褐色の流丸と、清冷水とが合流しており、よく

キヤンア地として使用されるらしく、きれいに整地されていた。カステラと煉乳で昼食をとる。

ここから、やはり赤い川について登るのであるが、途が急になって来た。養老や、庵座の滝のように岩から落ちたものはないが、急斜面を流れ落ちる水勢はすさまじいものであった。ここをトラバースして、岩を飛ぶのだが、不覚をとったのはこのときだった。「上からの方が楽じゃないですか」と、岩に足をかけたときだった。苔ですべって、あおむけにころんだ。瞬間、岩をさけて元の所へとおりました。これと同時に先生が左手を握って引きあげてくださった。暫く、心臓の鼓動を鎮めながら下を見て、あゝよかったとため息をついた。下は赤木が準備して、岩肌は出ていないから死ぬようなことはなかったにしても、足と手足をすりむいて、足腰はぬ位にはなっていただろう。新調のズック靴の底の凹凸が浅く、横森のみだったのが悪かったのだ。

今度は、左岸を岩について登るのだが、赤い岩肌がつるつる滑る。つかむ草木がないのが不気だったが、下を見ずに登る。

帰路が心配になったが、うかい路があるから大丈夫ときいて安心した。こゝういえば、所々にみられたペンキの目しるしがなくなっている。何故新道を登らないのかときいたら、新道といっても戦時中のもので、距離がある上に、ブッシュが濃くとも登れないから、下り専用に使っているのだとのことだった。

澤の水がへるにつれ、樹相も変化して、エゾイソツツジが多くなり、キンバイの群落が出て来た。途は依然として、沢に沿い、遂に、溜沢になったがやはり続いている。ブッシュを分けながら進む。途中で、下山途が分岐していた。この途を下ると、清水の合流していたところの230米の上に出るのだと教えてくれた。

ガレになる頃、山頂一帯が山焼きでもした様に黒々と横たわり、期待したお花畑は何も残ることが判った。7月26日の午后に発火して、三日間燃えつづき、鎮火したばかりだとの事で、大方登山者の失火だろうが、原因は判らないとの事だった。丁度、国体前の異常乾燥の続いた時のことだ。思別岳へのあり乾き切った途を想出した。

ガレ場をつめて鞍部へとりつき、約十米で頂上だ。主峰は類焼をまぬがれて、子シマギキョウが咲き乱れていた。一入の度の展望はまだ雲のこり、屈斜路湖や、摩周、阿寒の湖は見えなかった。東方に知床、硫黄、羅臼の山々が重なり、僅かに雪を残して、硫黄岳の硫黄の肌らしきものと共に、樹海

を点綴している。羅臼の方向に今は異国と化した国後島の山々が、雲を抜出て聳えている。国後島がこれ程大きいとも、又こんな高山があるとも思わなかった。

斜路平野の上は阿寒の上を流れた雲が止まって雲海をなしていた。

西方、眼下にはエトンビの学校から、上斜里の部落が眺められ、藻琴山のすえが網走まで延びて、屈斜路カルデラの大きさを誇っていた。その尽きるところに、トウフソ沼、網走湖が光り、オホーツク海は船影一つなく広い。文字通り、斧鉞の入り交い樹海は、その中が熊の巣窟だとは信じられぬ程静かだった。

監視所跡の建物は半地下式の備か一坪半あるがなして、ただ直垂に降る雨を避ける程度のものであり、想像していた泊る所とは、雲泥の差を避難小屋の寒屋といった感じだ。これを山小屋と呼ぶ道人のセンスに驚いた。

三十分位で頂上を辞して、先生に別れ、帰路を急ぐ。

新道もはじめの間はよかったが、きつい下りになると、全くのブッシュ漕ぎで、藪笹を尻に敷いて滑る方が早かった。軽装なので両手で樹にからみ、速く無事と下り、本道に出たときはホッとした。

勿論、バスは間に合わないが、それだけに急がねばと、山麓帯を走り下る。夕日に輝く斜里岳を振りかえりつつ、両側の畑や、ホフラ並木を眺めながら一路急ぐ。バス道とはいえ、一日二往復だから、人通りも従って少ない。はるかに異点のみえたと期待していると、それは親子づれの馬が遊んでいるのであって、上斜里の手前の橋を渡るまで三時間、一人の人間にも会わなかった。人家は点々とあるにはあったのだが。

### ▶昭和 新山◀

洞爺湖へ行く目的は、昭和 新山にあった。火山活動のところで、必ず写真と共に説明のある、あまりにも有名な火山であるだけに、どうしても、見ておこうと思った。

バスを降りて、湖畔にテントを張り終えたときは雨に変わった。

エゾ富士は勿論のこと、オロクレも、頭上の有珠岳も見えず、湖中の島が静かに浮いているだけである。

夜、雨が止んでから、樺村キヤンプ村を訪ねてみた。湖畔に並べられた大きな酒樽が、バンガロー風に仕切られており、数十組のキヤンパーが消えがらのファイヤーを囲んでさんざめいていた。

一夜は明け方が、まじ降っている。外へ出しておいたコッフェルと、飯盒

の水で炊事を終え、早く旅でもないので、晴れ向を待ったが、九時頃になると、有珠岳をあきらめ、昭和 新山へ向って出発した。

湖畔に沿って歩くこと約四十分で、登山口に着場へ着いた。丁度、行幸巻を明日に控えて、道路に砂利を敷いたり、布を巻いたり、ガラスを拭いたりしてごった返していたが、天候用資料が陳列されていたので、休憩を兼ねて見学した。模型や、生成過程のスケッチや、写真を興味深く見学した。

昭和 新山は今でも、割れ目からは、暗夜になると、赤い岩壁の輝きが見えるそうだ。

少し風が出て来たが、山はガスがかかって殆んど見えない。ドームの成長に伴って、隆起した十年前の田畑である藪だけはその位置を示していた。流石に今日は誰も来ていないと思ったり、ハイヤーで見に来た人であった。焼野と化したである山林の木立が切り倒されて、苗木が植えられていたのは残念だった。藪の方は焼岳のように土砂が流れて、そこに雨水による池が出来ていた。ハイヤーはその中を走って小屋のそばまで行っていた。

仰ぎみる新山は、物凄いガスで、昨日の午前中より遠望した白煙が気持よく立っていた山とは美事な夜ほり振りだった。時々、中腹のサンゴ岩と呼ばれる岩塊が、今にも崩れ落ちそうに格好であられた。相当、立派な道がわいていたのでそれを辿る。猛烈にガスを噴出している箇所を左をまいてサンゴ岩の辺まで道はあったが、塔岩塔にかかるあたりからは、どこを歩くにも歩けぬ程、岩が崩れていた。札幌の友はよそうと言いつづけたが、折角来たのだし、落ちて死ぬ藪友とこころではないので、前進に決めた。その辺は雨水が浸みて、気化したのが立ちこめており、二メートル以上は全然視界がきかない。凡上へ出て、サンゴ岩の所から面南をみたら、ガスは垂直に上って来て、眼下に緑の畑のみえたので驚いた。札幌のスキーのベテランも、昨夜の山岳部長も驚いてかすと云ったので、別れて、左折して、足首までもぐる砂の上へ出た。一歩あるくと、砂が今来た途の方へサッと崩れ落ちた。友のかけ声と、砂の上の足跡がただ頼りだ。これが正規のルートだろうと、それらしい所を辿る。

いつの間にか、合羽を脱いで、腰に巻いていた。手をかける岩を捜して、力を入れて引いてみるとゴロリと来る。その下は美事な針状に結晶した硫黄の肌だ。幸い、誰も居ないので、動く岩を皆ころがした。軍手を通して岩の暖かさが浸みてくる。岩を除くと、ガスが吹出して来たところもあった。調子にのって岩を落して、ふと気づいた。こんな風に落とすと、それが影響して、上の石がゆるんで落ちてくるんじゃないかと心配になってきた。案外、安定

はしているかも知れないが、簡単に崩れる石を足場にするのは心もとなかったが、とにかく、そこを乗り切った。

その上は潤澤をつめる様なもので、やゝ急であるが、しっかりした岩をつかんで登ればよいのだが、そこここから、ガスを噴出しているのは凄惨な感じだった。ガスは氷蒸気らしいし、風も若干あるので大丈夫だろうと、細いところまで神圣をつかう余裕が出て来た。登るにつれて、岩肌は非常に熱くなり、スックの下のゴムがとけるのではないかと気になり出した。途を右にしたら爪当りなきつくなった。しかも、風は吹き上げてくる。全然視界はきかないが、僅かに上の岩が見えるので、左へ転進した。ここはガスは噴いていないが、物濃く熱い。靴がこげぞらだ。軍手も襦衣もずぶ濡れになっているのだが、すっかり水気が無くなってしまいぞらだ。もうそこなのだとは思ったが、心細くなったので、頭上の岩塊を手でたたくて下降にかかった。下降となると大変だ。サイルがないので、深重に一歩一歩を確実に下った。幸いガスが深いので、高度感がないので助かった。ごく僅かの距離だったが緊張して居たので、長い時間がたつ様に見える。やっと登路のついているところへつくと、二人は寒そうに待っていてくれた。

頂上まで登る人もあると聞いているが、良い天気の日には、途を上手にとれないと熱くて登れないだろう。山が出来て己に十年たったというのぼまだこの有様である。餅物の湯は仲々さめにくいものであるが、これほど大きい山の地下の岩漿は一寸やそつとではさめないのは当然である。此の山よりずっと古く出来た禪前岳や有珠岳のドームでも、熱くて通れないところがあるぞらだ。

山は三〇〇米そこそこだが、畑地から忽然と出現したものに面白山である。一寸比較にはならないが、大洞山の蕪野と山を小さくして、その上に熔岩の塔を置いた様であり、焼岳の上へ塔を置いた様である。そして、それが出来たののホヤホヤで、岩の裂け目から湯気を出し、あんを覗かしているといった山である。

自然の威大さをつくづく感じさせられながら、幾度も振りかえっている所へバスが見えたので、走ってとぎ乗った。

# 鈴鹿のむかし

松阪山岳会 山口政一

私が初めて鈴鹿に入ったのは、昭和四年であるから、今から二十六年前のことである。

その頃の湯山は、今のように繁昌していなかったのに、湯山線に乗る人も少なかった。それでも温泉街の繁華さを兼って、深橋の手前、即ち、今のバス停前所のところから、右に折れて、不動堂の前まで山道を辿り、蒼滝へ下って、北谷へ入った。勿論バスもなかった。

その頃の北谷は、北谷は裏途と呼ばれるだけに、登る人も殆んどなかった。御在所岳へ登る人が少なかったためでもある。今では恰好の岩場として、クライマーに親しまれて居る藤内壁は、登攀不可能とされて居た。私も藤内沢にはいりこんで、「命が危い」と引返して来たことがある。

一の谷も、今とはすっかり違った様子を呈していて、山の家は勿論なく、片隅にポツンと一軒、売店兼休み小舎があっただけである。中道が開けたのが昭和十年頃であろうか。一番良く踏まれて居たのは、表道であった。頂上の御岳神社だけはその頃でもあった。昭和十年頃だったが、初めて山に登ると言う勤務先の同僚は草鞋ばきで、出かけた。然し、その頃でも、御在所岳鎌ヶ岳は比較的、良く登られて居て、休日の往復には、ルソクサック祭の若人達と湯山線に東合わせた。

これに比べると、根平峠の途は全く隔世の感が深い。この途は昭和二十五年、国体が此の附近一帯で行なわれ、ヒュッテが建てられてから、急速に開けたようである。昭和十年に此の道を通って、兩乞岳に登ったときは、発電所から上は、あるがなきかの踏跡に過ぎなかった。それでも炭焼きは相当にはいって、時々出会った。今でも鈴鹿では、炭焼きを見掛けるが、江州側へ相当深く入りこんでいて、伊勢側は比較的、少ない。昔は伊勢側で相当焼いていた様だ。

今てこそ、釈迦岳への登路は、松尾根途、流谷の途、麩座谷の途、伏木谷からの尾根伝い等沢山開けたが、その頃、発行された住友山岳会の「近畿の山と旅」の初版には、南峠からの尾根伝いと、赤坂谷からの廻行とを挙げて居たに過ぎないように思う。

根の平峠の途は、その昔はよく京都の往來に利用されていた。元龜元年五

月二十一日、織田信長が深井、朝倉の糧合軍に悩まされて、京から岐阜へ引上げるとき、蒲生賢秀を道案内として此の途を通ったのである。併し、千種村の北方に当る杉谷にあった円通寺の住持、善信坊が、佐々木承禰の頼みを受けて、此の山中で、信長を狙撃したのである。善信坊は中々鉄砲がうまくいったといわれて居たが、信長に運があったものか、弾丸はその袖を貫いただけで、信長は無事だった。善信坊はその時は逃げるこゝろが出来たが、其の後天正三年に捕えられて、土中に埋められ、竹錐で首を掬がれて、七日の後、遂に死んだと伝えられている。

満洒な朝明ヒユッテの建っている此の峠途は、全く明るく、すべてが近代的で、昔の傳はなく、総べてが夢である。

愛知川の通行も、今でも此のヒユッテを中心に、随分、容易くなったが、以前は伊勢側からは八凡峠を越えて、杜葉尾に出て、こゝから通行するが、或いは、少し短縮して、中峠からセンコノ谷に下って本流との合出より谷すじをつめたのである。

谷歩きをする人も今とくらべると、ずっと少く、途中二泊又は三泊を要し、現在のヒユッテを早発すれば、御在所岳まできわめて帰宅できるのとくらべると、雲泥の相違がある。

八凡峠は昔から良く通られた道であった。大永六年、運歌師の宗長が樞戸の人夫三十人に輿をかつがせて、伊勢側から此の峠に登り、峠上の茶屋で一夜をあかした。峠からは伊勢平野の広袤たる景観が見渡され、その雄大な眺望に絶叫したのである。

此の峠はどうしたものが、昔から、馬や輿を運さなかつたらしく、「宗長手記」によれば「此の峠には昔より馬輿とほらめ仔細ありと聞けども、老の足一歩も進まず、人に負るれば胸も痛み、息も絶え、谷にも暮入りぬべく覺え待れば、老の輿かつぎに三十人毎戸よりやといひ、左右の大石をふまへおち、滝津瀬をまたげ、蔑々心をまだひし空へもかき上るこゝちして、やりやう峠の一屋に一宿云々」とある。

宗長は翌日、紅葉で名高い永源寺に出で居る。

又、室町時代の末期に衰微した皇室の費用調達のため、奔走した公卿、山村良継も江洲側よりこの峠を越えて伊勢に出たと手記に見えて居る。

昭和十年、中峠を登って、釈迦岳を目指したが、天候悪化のため、引返してセンコノ谷を下り、杜葉尾に出て、河原でキャンプを張ったことがある。その当時、センコノ谷の道は荒蕪して居たが、今はどうであるか。

昨年、高体運の山岳競技に参加して、石押峠を越えて、茶尾川に出た時、

沿岸に立派な林道がつけられて居るのに驚した。

鈴鹿の山歩きも、年々、途が出来たり、小舎が出来たりして、段々便利になって、誰でも容易く歩けるようになったことは、誠に岳人にとって嬉しいことである。併し、一面、鈴鹿特有の、わがしさとかが、静寂さとかが段々失なわれて行くことは、反面一沫の淋しさを禁じ得ない。いたずらに昔を懐古して詠嘆するのではないが、静かな山を望む気持は登山者の総べてが持つぬがいでないだろうか。山は人手を入れずに自然のままにおくことこそ我々岳人の務めである。

## 若山五郎君の死を悼む

伊 達 忠 雄

暑蘇の酔も未だ醒めない一日三日の夜、神戸町の伊藤さんから電話で、五郎君一行の遭難の報を受けた。

その日は、私は今年の果体山岳部の予定コースになって居た鷲嶽の登路を調査するために、早朝から、伊勢市へ行っていた。そして此の暖い地方には珍しい、吹雪にあって、途を誤り、相当へばって、夜おそく帰ったところであった。

全く寝耳に水の例えの如く、愕然として、暫く言葉も出ない状態であった。岩稜会が年の暮れから神河内に入り、後又白谷から、前穂高岳の北尾根を登攀する報を受けていたが、岩登り技術の優秀な人達のことであるから、間違ひはないものと安心はして居たが、ここ二三年は暖冬異変で、冬山はアノーマルな状態であった。ところが、今年は常態の気象で雪が深いと聞いていたので、よく会う隊員の一人は、老衰心玉がら、充分注意するようにと話していた。

山の遭難はいくら技術がすぐれ、経験の深い人でも、その時の山の状態や身体のコンドーションにより、避けることが出来ないことがある。

私が学生時代、聖岳、赤石岳の積雪期の初登頂を計画して、出発しようとして山岳部のルームで準備していた時に、当時では、山のオ一人者であった大島亮吉氏が居られて、諄々と冬山についての注意を与えられ、功をあせて無理をしないようにと呉々も注意せよと、全く親切な御教示を受けて山に入ったのであったが、おかげで、私達は無事に目的の山々を全部踏破することが

出来て、喜びに駒をふくらませて鹿場谷へ下って来たのであったが、宿に着いて、北尾根から大島氏が墜落して行方不明になったと言うニュースを新聞紙で読んで、今更の様に愕然としたのである。

山を愛し、高い山のなかでの生涯を遊ぶものは、その代償として、死が早く到来することは避け得られないものであろうか。

若山君は兄さんの石岡さんの感化をうけて、<sup>津</sup>北島高峯時代から登山を始めた。その登山方法はきびしいもので、安易な登山は真の登山家のとらぬものとして、困難なものから、困難なものへと進んでいった。併しこれは青年の客気に依って行方無謀なものではなく、順序をおって行っていた。本格的な岩登りを始めて未だ二三年にすぎないのに、彼の緻密な頭脳と、勇敢な精神によって、その技術の上進には、誰れも舌を巻く程であった。

併し、彼れはこれを誇る様子はなく、常に謙譲であった。又、内には熱烈な山への情熱を燃やしながら、これを口に出して言うことなく、いつも冷静であった。

彼れは非常に調和的で、彼の居るキャンプは常に春の如く陽気で、笑い声が満ちていた。誰れからも「五郎ちゃん」の愛称で、好かれていた。

彼れは、登山を離れても、実に純真な良い青年であった。かくも早く山のお召しに遇わなかったならば、きっと、立派な登山家となつたであろうし、又、社会人としても定めし立派な人となつたであろう。左んと言つても、彼れを失つたことは、かえすがえすも残念なことである。

併し、我々の嘆きはともかくとして、彼れを掌中の玉の如く、愛していられた御両親の御悲数は誠に生命を削る想いであつたであろう。我々はこの深き御歎きを御慰めすることは、とうてい出来ないうが、彼れの遺体を、氷雪に埋れた谷間から、御両親の御膝元へ、一日も早く帰すことが、せめてもの御慰めとなるであろう。

我々は唯だ、唯だ彼れの冥福を祈ると共に、彼の貴い死の犠牲によって知らされたナイロンザイルの性質をよく把握して、今後の登山をより一段と安全なものとしなければならぬ。

私は指しみて余りある、彼の死に接して、深く哀悼の意を表し、この拙文を書いた次第である。

## 前穂高岳東壁遭難報告書

岩 稜 会 沢 田 栄 介

厳冬期の奥又白谷生活、特に北尾根才四峯パットレスから前穂高岳東壁に連る雪と岩との殿堂こそ、我々山男にとって、かぎりない魅力であろう。

過去、幾度かの諸先輩の懸命の努力にもかかわらず、厳冬期には硬としてその壁里に入るを許さない才四峯正面ルート、或は幾多の尊い犠牲を払つても、なおかつ、その完登を許さない前穂高岳東壁。これこそ常に脳裏に焼きついて忘れることの出来ない処である。

ここに我々は熱烈なる闘志をたぎらせて、敢然と挑戦したのであるが、遭難という全く不面目な事態を惹き起し、爲に、各山岳会の皆様に、大枚な御心配と、御迷惑とおかけしたことは誠に相済みぬことと、深くお詫が申上げる次第であるが、此事が今後、山岳界へ少しでも役に立てば幸甚であると思ひ、菲文をも省みず、筆をとつた次第である。

昭和29年12月22日、先発隊として、石原弟、沢田、南川、若山の四名は勇躍して、上高地へ向つた。明神池養魚場を経て、丈余の積雪を踏みわけ、又白池室の木付近へベースキャンプを設営し、荷揚げを終えたのは29日であった。此の間、リーダー石原兄の参加をみ、いよいよ好天気を待っての体勢は整つたのである。石原兄弟、沢田は復察とラッセルを兼ねてB沢上部まで行く。ここから眺めた東壁下部、即ち、北壁と称する部分は雪も沢山つき、一見したところ、登攀は容易であるとの印象を得たので、一同満足な気分で大幕へひきかえした。31日は逆き出しせうな空から雪が舞ひ下つていた。午後、高井兄弟が参加した、いよいよ29年も終りである。

明けや元旦、午前3時、満天の星にともび起き、急いで準備にかかる。携行品として、八種ナイロンザイル40米一本、ハンマー2個、カラビナ10個、アズミ2個、捨縄、ツェルトサブザック2個、ヘッドライト2個、マッチ、筒型メタ、ローソク、それに個人装備として各自、毛糸セーター1着、靴下2、手袋、食糧としてドーナツ15個、チョコレート3枚、干葡萄、甘納豆、ピーナツ、餅菓子、それに大型テルモスに詰めたミルクであつた。

パーティは三名とし、石原弟、沢田、若山の新人で編成した。六時になつてようやく明るくなったので、見送りの友人と握手し、石原リーダーの激励



の言葉を後に天幕を出発した。

天候は全くの快晴だが、非常に寒い。零下二十五度だった。全員非常に快調で、腰までもぐるラッセルもなんのその、アタックの喜びに燃えさ我々はぐんぐんピッチをあげていく。七時十分、インセルの中程で、折からの御来光を仰ぎ、その神々しさに全く魂をうたれた。

7時30分、沢上部でアンザイレンをする。オーダーは石原、若山、沢田の順である。テルモスのミルクをあけて、チョコレートをつまみ、いよいよ高距150米、傾斜60°の北壁に取りつく。8時、ルートは昨年夏のルート、即ち、一番左側、右岩稜寄りか容易とみられるので、これを採る。先ず、Dフェース基部に沿って一ピッチ、それから左上方に一ピッチと雪の斜面を登り、次に4米のクラックにハーケン一本をかし、先人のハーケンを利用して東り越え、チムニーの基部に入る。雪の状態は全く悪い。岩の上に乗っている雪は固まることなく、さらさらと落ちてくるので、アイゼンのツアッケが全然きかない。トッフは全く大変で、雪をかき落して登らなければならず、思わぬ時間の消費をきたした。約6米のチムニーに入る本のハーケンを打ち、やっこのことで、こつを切り抜けて上部の雪のリッジに出る。時間は11時、休む間もなく、急傾斜のスノーリッジを一ピッチ半を登り、いよいよ難関のオ2テラスへ抜ける約40米の岩壁に向う。傾斜もぐんぐんと増し、非常に困難に見える。しかしながら、我々の闘志は全然おとろえず、かえって奮いたっただけであった。トッフは左側のチムニーをさけ、右側のフェースを微妙なバランスで登り、次に、チムニーに沿って五米登ると、行先はたと止った。オーバーハングである。ハーケンをきかして、物凄くファイトでこれを越える。非常な悪場である。チムニーの左側へトラバースする石原の姿が現れ、大きく左に廻り込んでオ2テラスの末端の雪の斜面に再び姿を消した。此处でサイルの回隔を変え、石原と若山の向を30米にし、若山をハング下まで登らせる。やがて、サイルがピンと張り、アラヨーの声が聞える。1時50分、丁度、この時オ4峰頂上から、大阪市大のパーティーの激励の言葉を受ける。セカンドの若山はどうしても此のハングが越えないのか、上からの救命の確保があるにもかゝらず、非常に苦しんでいる。突然全く、突然ザサーと、左側のチムニーを滑り落ちる雪と共に、上のサイルが物凄く緊張した。どうしたと声をかけたが返事がない。上から驚きの声か聞えて来た。オーバーハングの東り越しにかつき、そのままズルズルとチムニーに滑り落ちたらしい。そのままの姿勢でいるように、声をかけ、沢田はハング下まで登り、元気づいた若山を元の地点におけ、肩車でハングを越し、左

へ廻り込んでオ2テラスへ出たのは14時50分であった。直ちに、ベースキャンプへ向って、マッホーをかけた。オ2テラスの急な斜面を2ピッチ登り、Aフェース下じやつと15時10分についた。

遅い昼食をとり、甘納豆をほぼりつつ、Aフェースを懸命に注視する。Aフェースは高距約80米で、傾斜65度あり、北壁に比して、積雪が少なく、

此の頃から、さしもの快晴もようやく薄もやがたちこめて来た。天幕に向かってマッホーと呼びかけた後、直ちにとりつく。時まを3時半である。右側ルートを忠実に登る。1ピッチ後、夏には問題のない細いクラックが非常に悪い。ハーケンを2本打ち、アブミを使用する。次は傾斜は緩くなるが、スラスラ状の岩に不安定な雪がべつとりついていて、全く感じの悪い所である。元気が今にもくずれ落ちそうなる所を慎重に登る。

もう日がとっぷり暮れる。時計を見ると5時半である。頭上30米程に見える頂上のスカイラインがおいでおいでをして差招いているようだ。ザックからライトをとり出して、頭上につけたけれども、矢張り視界はきかず全く致命的であった。仕方なくビバークと決心する。併し、此の地点では、身体一つかくすところもないし、それどころか安全な足場一つ探すことも出来ない。一寸暗然たる気持になる。すると、突然、石原が喜びの声をあげた。ピッケルで雪をかき落していた時、偶然にも岩のくぼみを発見した。漸く岩塔の脚をなでおろし、そこへ集結して、雪を掘り出し、中1米20、高30の穴を作り、奥行き1米の穴を作る。そこへ三人が並んで腰を下し、足を投出して穴の中へ入れる。併し上半身は全然外へ出ており、特に尻が半分しか乗っていないのである。気をゆるめると、今にも真逆さまにオ2テラスへ落ちてゆく様子がする。各自ピッケルで完全なるセルフビレイを行う。18時になって、真黒な空からは粉雪が舞い始め、前途多難を思わしめるが、明日へ希望つなぎ、ツェルトを冠り、昼食の残りを噛みしめる。身動き一つ出来ない姿勢のためにセーターも着る事が出来ない。アイゼンの紐はこちこちに凍結してしまった。凍傷を心配して、ともすると、ゆるむ心をばげまして、懸命に靴の中の指を動かす。寒さは全く厳しい。それでも疲れているためかうとうとどしどししかけるが、矢張り眠れない。足はじーンとして感覚が失われてゆく。

今頃、下の天幕ではどうしているだろう。我々の帰りの無いのを何と想像しているだろう。ラヂュースのうなっている天幕の中で暖い雑煮を満腹して居る仲間の顔が目に見え。今日は元旦な筈だ。

何故、我々はかくもして山へ登らなければならぬのだろうか。唯だ山の呼ぶ声に夢中になって良いのだろうか。

何時の間にか、左側の若山がやすらがな駈をたて始めた。漸く、落着きを覚え再びうとうとする。三時頃であろうか、三人共ばっちり目を覚す。体中一面雪で埋まっている。非常な寒さだ。互に身体と身体とをぶっつけて暖をとる。回型メタに点火しようとするも、吹き込む風と雪とでたちまち消えてしまふ。火の消えた後が全くやりきれない。5時6時と時計の進むのが、嫌の歩みよりのろくさい。

漸く明るくなり始めたが、依然雪が止まない。ツェルトから体を乗り出せば、みるみる中に、マツケ共に体がこぼぼってしまう。暫く、暖くなるのを待つて行動を開始することにした。

8時になって、石原が先ずビバーク地点の左側を調べる。そこはスラブ状の所へ新雪が附いて、全く不気味な程不安定に見える。それでも、4米程登ったが、今にも雪が落ちそうに、引返した。今度は右側のナムニーへ取付く。約2米上に岩の突起があり、更に、その上3米の所に頭着なオーバーハングをなす突起がある。此処を越すのがママ處と見られた。ハング下までは推なく登り、突起にザイルをかけ、これを手がかりにして真正面から乗り切るうとしたが、昨日の疲れのため、どうしても乗り越えない。暫く休憩の後、二度、三度と試みたが矢張り駄目だった。そこで、オーダーを変更して、ミントルの若山が先頭となり石原と交代する。

若山も石原と同様になんなくハング下に至り、突起にザイルをかける。暫く真正面から乗り越えようと試みていたが、駄目なのが、今度はザイルを突起にかけたまま、右側岩壁に沿って逃げ切ろうとして、一步トラバースを開始して、直登にかかろうとした瞬間、「アッ」と一声叫ぶと共に、右足をスリッパした。下で懸命に確保して居た石原の足に触れて、登は消えてしまった。不思議にも墜落によるザイルのショックが全然ない。おそるおそるザイルをたぐってみる。これはなんとしたことか、8折強力ナイロンザイルがぶっつり切れている。恰も鋭い刃物でたち切ったように。「五郎ちゃん、五郎ちゃん。」とオ2テラスへ向って必死になって叫ぶ。9時20分、更に声を張りあげてどなっても応答がない。暫くは呆然として言葉が出ない。ようやく息をとりなおして、天幕へ向って「マッホー」を連呼し、救援を依頼する。天幕からは直ちに「了解」という力強い石原リーダーからの応答があり、ついで幹川の返事がある。

再びビバークの地点へ腰を下す。このまゝ救援を待つか。来るとすれば早くとも14時半になる。或いはオ2テラスまでアツガイレンで下り、若山君を救し、左側V字状雪渓へ向ってトラバースして逃げるか、或いは自力で

Aフェース最後の20米を登り切るか、方法は三通りしかない。併し乍ら、疲れ切った身体には、このショックは余りにも痛手だった。登攀の自信を失った我々は救援に来る友を信じ一日でも二日でも待つことに決めた。

雪は休みなく降っている。昨日声をかけてくれた大阪市大のパーティもこの雪では前穂高岳の頂上へは登れないだろう。

暫くツェルトをかぶっている内に、漸く身体も休まった。するとオ2テラスへどうしても下らなければならぬという考えが強力に支配し始める。

アツガイレンの準備にとりかゝる。先ず、石原が下り始めたが、オ2尾根近くで、救援隊らしい声が生じたので留った。マッホーをかける。突然、高井兄の音が同近かに聞えた。「元気か」、「ザイルが切れて五郎ちゃんが落ちたんだ」、「落下地点は」、「わからん」、「現在の位置は」、「頂上直下20米」、「解った、動かないでいてくれ」こんな言葉がかわされた後、アツガイレンをやめ、もとの地点へ腰を下す。14時半である。

A沢から頂上に至る所要時間を幾度も幾度も計算し、二人で話し合った。急に空腹を覚え始めた。食物らしいものは昨日の昼食をしたきりだったので止むを得ない、と言っても何物もなく、ザツツをひっくり返して、漸く甘納豆を五つ六つ発見して、二人で分けて食べる。食欲は益々盛んとなる。根みのオレンジ着色のナイロンザイルが密柑に見えて、空腹をかり立てる。そんな事を思い乍らも時間は刻々と経っていく。16時半になっても、救援隊の来る気配もない。不安な気持ち湧き始めた。併し、石原リーダー、高井兄、それに東壁の大先輩上岡さんも天幕に居られる筈だ。絶対来てくれる。こう確信してからも、互に見合す眼と眼、顔には力かない。5時半、日も暮れはてて、再び飢えと寒気にさいなまされる長い夜を迎えなければならなかった。

三人から二人に減ったので、幾分楽に座れるようになったものの、体の疲れは覆い隠すことは出来ない。天幕に向って叫ぶ声も枯れて声とならぬ。これぐらいで参ってしまったものが、ナンガバルバットで遊んだメルクルを見よ。明日こそはがんばると、互に励ましあう。コブ尾根、北尾根、蓮谷と合路の想出はつきない。楽しかったその時々々の想出が、走馬燈の如く次から次へと出てくる。こんなことを覚めるともなく、眠るともなく想い絶ゆる。はあとして目が覚めて眺めると、オ4峰は正面ルートをスカイラインに黒々と厳然と聳えて居る。何時までも山は我々を守って居てくれるだろう。段々と睡魔がおそってくる。此のまゝ、睡ってしまおう。彼等の腕に抱れつゝ何時かおむってしまった。

午前4時頃か、厳しい寒さに夢が破れた。とても堪えられない寒気だ。騒

煽をつけようとしても風は吹き消されて駄目である。此の時の二人の衣類は  
 沢田は、目出帽、毛莫大小襦袢2枚、毛カッター1枚、毛スボン下1枚、毛  
 ニッカー1枚、ストッキング1枚、靴下太毛糸2枚、毛糸手袋1枚、毛皮手  
 袋1枚、ウィンドヤッケ上下で、石原は毛莫大小襦袢毛カッター、セーター  
 毛スボン下、ニッカー、ストッキング、太毛糸靴下2枚、毛糸手袋2枚、ウ  
 インドヤッケ上下、それに帽子を失った代りとして、襟巻をかまっている。

雪は依然として、しんしんと降っているが、風が比較的少ないのが何よりあ  
 りがたい。

足の感覚が全然失っている。そう言えば、昨夜は全然足の串を踏えもしな  
 かった。矢張り、アイゼンの紐の固さが原因となったのであろうか。書物で  
 見たアンナ・フルナのエルソーゲ隊長の足が眼先にちらつく。

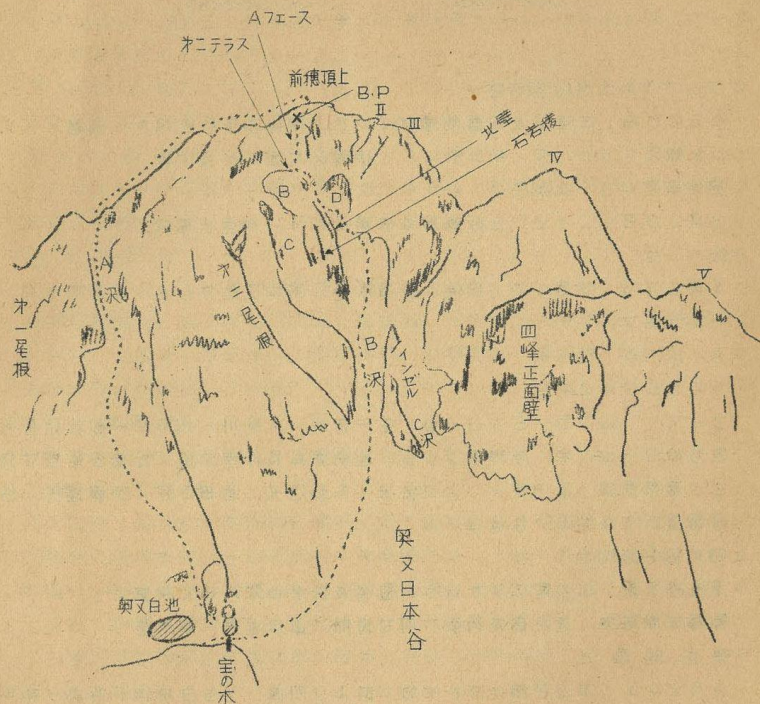
やっと長い長い夜が明けた。陽があたり始める。ツェルトをぬいで天幕へ  
 向って叫ぶ。声が枯れると笛を吹く。天候は板復しつゝある。一時間おきに  
 マッホーをかける事にする。7時、今一度昨日のチムニーに取りつく。矢張  
 り駄目だ。これしきのハンクぐらいなんだと負けおじみを言い作るシエルト  
 をかぶる。

10時20分、マッホーをかけようと上部の丘の地点をラッセルの跡が、  
 くっきりと見える。更にその跡をたどると、黒点が四つ上に向って動いてく  
 るのが見える。嬉しさの余り、マッホーを連発する。さあ引揚げの準備だ。  
 もうじつとしていられない。ルックを背負ってしようとしてキ、どうするこ  
 とも出来ない。互に苦笑しながら再びツェルトを取り出す。今度こそ時ま  
 では来るだろう。突然頭上からマッホーがかかる。「ここだ、ここだ」と合  
 図する。

暫く待つ。するすると高井兄の見事なアッフサイレンが現れる。「よう頑  
 張った……」感激に何も言葉が出ない。持って来てくれた暖いミルクを飲ん  
 で少し元気が出て来た。引揚げの準備にかかる。二日向のオカン場となった  
 このテラスに感謝を捧げ、はるか下の第2テラスへ帰って合掌する。「及よ、  
 安らかに眠れ」と別れを告げる。

先ず石原が頂上からのザイルに身を結び、登り始める。ルートは左側スラ  
 プ状の方だ。14時40分、続いて沢田が登る。腕の力が全然ないので、上  
 からの力強い引揚げに頼るより仕方がない。頂上には上岡さん始め、早大O  
 B、南面登高会、面糸屋の方々の暖い手に迎えられた。やがてA沢を経て、  
 17時10分、無事ベースキャンプへ達した。

もう空は暗くなりかけて、星がちがちか光りを増していた。



# 岳連ノート

## ☆アンナフルオ登山報告会

2月20日、三重県立図書館講堂に於て、伊藤洋平氏を招き、講演とスライド映写を行う。夜、東洋軒に於て伊藤氏を囲み会食す。

## ☆藤原岳登山コース調査

3月20日～21日、三岐鉄道の依頼に依り、伊達出張す。

## ☆総会

4月24日、津高に於て開催、役員改選、国体予選打合せ、年度スケジュール決定す。

## ☆国体予選

5月23日～24日

コース・山の家-三ツッロ-鎌ヶ岳-岳峠-松尾川-武平峠-御在所岳-表登山口-山の家・参加者20名、監督委員長伊達忠雄、監督委員若林修三、茶森秀雄、富内英一、上田定夫、大西保夫、倉田正邦、伊藤経男、谷口嘉男、中島昭夫、岩尾淳一

## ☆国体選手総会

予選終了後、山の家に於て行う。監督及選手は次の如く決定  
監督加藤富雄、選手高井利恭、河村俊郎、山口温夫、森泰造

## ☆夏山映画会

6月24日、津公民館に於て午後7時より開催、25日午後1時より神戸高校に於て、午後7時より四日市公民館に於て開催す。

## ☆国体準備会

7月17日、晚学園に於て行う。

## ☆国体選手派遣

7月20日、四日市駅出発、団長伊達忠雄、監督、加藤富雄、選手河村俊郎、山口温夫、高井利恭、森泰造、オープン選手、大西保夫、西川栗

## ☆第九回国体

7月24日～28日、大雪山に於て挙行、選手はB班に参加、オープンはおー班に参加す。

## ☆高体連体育大会山岳競技準備会

9月11日、津高に於て行う。

## ☆高体連体育大会山岳競技

9月24日～26日、宇賀溪-茨川-藤原岳で行う。26日は暴風雨と成り予定を変更して下山す。

## ☆県体打合せ

10月9日、津高に於て行う。

## ☆県体山岳競技

10月16～17日、岩内-観音岳-堀堀山-飯福田山のコースで行う。参加人員約90名

## ☆岩登講習会

11月13日～14日、藤内壁に於て行う。

講師石岡繁雄、指導員松田武雄、室敏彌、沢田栄介、岩佐弘、今井喜久男、三林隆、杉本平、中沢孝一、河村俊郎、加藤富雄、森泰造、南川

参加団体19団体、90名

## ☆スキー映画会

11月30日午後7時より四日市公会堂に於て行う。

## ☆岩校会の遭難

1月2日、岩校会が前穂高岳東壁に於て遭難したとの報で、伊達神戸町の岩校会の遭難本部へ4日夜訪問、御見舞する。5日、伊達事務所を訪問し救護につき協議す。連盟から上田、加藤両氏を派遣す。7日事務所を訪問し、伊達、県体育協会を訪問し、遭難結果を報告し、援助方を依頼す。三重大学農学部及学芸学部へ訪問し援助方を依頼す。

## ☆臨時総会

1月30日、白子公民館に於て、岩校会遭難報告を行い、捜索費の資金カンパを行う。

# 山行記録

## ◆宇治山田高校山岳部

△御在所岳、鎌ヶ岳 (国体予選)

6月22日~23日

中村昌司、岡安紀彦

△御在所岳、鎌ヶ岳

6月29日~30日

中村昌司、吉富一郎、鈴木一暢、他2名

△白馬岳、鎌ヶ岳、唐松岳縦走

7月23日~29日

富内英一、岡安紀彦、鈴木一暢、安田勇、他4名

△大台原山、山上ヶ岳、猿迎岳

8月7日~11日

吉富一郎他4名

△宇賀溪、藤原岳 (高体連体育大会)

富内英一、中村昌司、吉富一郎、東谷彰、鈴木一暢、安田勇

△飯福田山、観音岳、癸坂山 (県体)

10月16日~17日

富内英一、鈴木一暢、安田勇

△藤内壁 (岩登講習会)

11月13日~14日

東谷彰、鈴木一暢、安田勇

△鷲、嶺

12月25日

富内英一他3名

## ◆宇治山田商工高等学校

△御在所岳、鎌ヶ岳 (国体予選)

5月22日~23日

奥野、中川、田畑、竹中、中村

△穂高岳、焼ヶ岳

7月23日~29日

中村、北村、小倉、佐野、中村、近野、村木

△志摩キャンピング

8月2日~4日

中村、馬瀬、三宅、山中、志賀

△御在所岳、鎌ヶ岳

8月6日~9日

奥野、中川、太田、佐野、中西、中村

△朝熊山

8月20日~21日

中村、奥野、佐野、中村、三浦、村木

△宇賀溪、藤原岳 (高体連体育大会)

9月24日~26日

中村、奥野、佐野、中村、南、小林

△観音岳、堀坂山、飯福田山 (県体)

10月16日~17日

奥野、佐野、中村、近野

△岩登講習会 (於藤内壁)

11月13日~14日

奥野、佐野、中村、近野、河北、元坂、小林、中村

△高麗岳、嶺岩

11月28日

中村、奥野、佐野、中村、近野

△朝熊山

1月8日~9日

奥野、佐野、中村、近野、河北、三浦

石原弟、今井

## ◆岩登会

△奥穂高コト尾根

28年12月24日~1月6日

石原兄、上岡、松田、室、高井、森、北川

沢田、石原弟、太田

△御岳

2月上旬

石原弟、北川

△前穂高岳北尾根

4月24日~5月7日

石岡、石原、松田、森、北川、石原弟、沢田

若山、高井兄、高井弟、今井

△穂高合宿

7月26日~8月18日

石岡、石原兄、伊藤、北川、松田、室、石原弟

沢田、太田、長谷川

△北海道大雪山

7月下旬

高井兄、森

△北岳

7月下旬

石原弟、沢田、若山

△穂高岳沢

9月22日~27日

石岡、伊藤、杉浦、森、北川、室、石原弟

若山

△岩登講習会 (於藤内壁)

11月13日~14日

石岡、室、松田、北川、森、今井、沢田、三

林、岩佐、毛塚、長谷川

△明神岳

10月31日~11月3日

## ◆亀山高松山岳部

△針の木峠、槍ヶ岳縦走

7月24日~8月2日

上田定夫外11名

△宇賀溪、藤原岳 (高体連体育大会)

9月24日~26日

上田外

△観音岳、堀坂山、飯福田山

10月16~17日

外

△岩登講習会 (於藤内壁)

11月13日~14日

外

## ◆津高松山岳部

△御在所岳、藤内壁岩登練習

6月5日~6日

南守、亀井元彦、久保茂喜、吉田邦雄、吉井孝

△御在所岳、藤内壁

4月3日~5日

南守

△島帽子岳、槍ヶ岳縦走

7月22日~29日

中谷和夫、別所站、結城崇、南守、吉岡邦雄

竹田淳、岩井源昌

△御在所岳

8月27日

吉岡邦雄、久保茂喜

△宇賀溪、藤原ヶ岳 (高体連体育大会)

9月24日~26日

別所站、結城崇、沢田行彦、中川正彦、吉田

那雄 竹田寧 岩井源昌  
 △岩登講習会(於藤内壁)  
 11月13日~14日  
 吉田那雄 岩井源昌 齊藤道秀

◆津工業高等学校山岳部

△御在所岳  
 1月5日~6日  
 伊藤外1名  
 △鎌ヶ岳  
 5月2日~3日  
 伊藤外

△白馬岳  
 7月23日~28日  
 伊藤外10名

△観音岳 堀坂山、飯福田山(奥体)  
 9月24日~26日  
 伊藤外2名

△岩登講習会(於藤内壁)  
 11月13日~14日  
 伊藤外4名

◆東亜紡織KK泊工場山岳部

△穂高岳(唐沢を中心に放射状登山)  
 7月10日~14日  
 参加人員9名(内1名女子)  
 △白馬岳、鍾ヶ岳、恵松岳、祖母谷温泉  
 8月14日~16日  
 参加人員6名

△御在所岳、鎌ヶ岳、雨ヶ岳  
 9月10日  
 数パーティに分れて登る

△朝明ヒュッテ、ハト峯、根の平峠  
 11月14日

59名の集団ハイキングを行う。

△宮栗峠、入道ヶ岳  
 11月21日  
 参加人員29名

△黒菱スキー行  
 12月28日~1月3日  
 参加人員5名

△志賀高原スキー練習  
 12月28日~1月3日  
 参加人員9名

◆東亜紡織柳工場山岳部

△御在所岳  
 7月10日  
 参加人員 男3名 女4名

△捨ヶ岳  
 7月24日~26日  
 参加人員 4名

△鎌ヶ岳  
 8月1日  
 参加人員 男3名 女9名

△竜ヶ岳  
 8月13日~15日  
 参加人員 男2名 女2名

△大台ヶ原山  
 8月13日~15日  
 参加人員 男3名

△日馬岳、鍾ヶ岳  
 7月31日~8月3日  
 参加人員 女1名

△御在所岳、国見岳  
 8月29日  
 参加人員 男3名 女2名

△御在所岳

△朝明ヒュッテ、腰越峠

4月30日~5月1日  
 リーダー中川外2名

△東 鞍岳

5月1日~4日

リーダー南谷、室、日置、近藤

△白馬岳

7月10日~12日

リーダー中川、伊藤、諸戸、矢野

△度知川

7月10日~12日

リーダー日置、高橋外8名

△藤内壁、藤内沢

7月31日~8月1日

リーダー中川、中道、馬頼、伊藤

△藤内壁

8月7日

リーダー中川、伊藤

△御在所岳、国見岳

8月7日

リーダー諸戸和子外2名

△白馬岳、唐松岳

8月15日~18日

リーダー室、南谷外3名

△鎌ヶ岳

8月21日

リーダー中川外6名

△藤原岳、炭川

9月11日~12日

参加人員12名

△石徹白高原スキー練習

12月30日~1月3日

リーダー南谷、室、日置、高橋外2名

9月16日  
 参加人員 男2名、女2名

△鎌ヶ岳

9月16日

参加人員 男5名、女15名

△宇賀溪、石博峠

10月17日

参加人員 男15名、女83名

◆東洋ペアリング山岳会

△池の平スキー行

1月1日~4日

中川

△白馬岳スキー行

1月1日~4日

リーダー室、森田、西村

△藤原岳スキー練習

1月29日

参加者 18名

△藤原岳スキー練習

2月4日

リーダー室、日置外4名

△の谷スキー練習

2月4日

リーダー中川、南谷、諸戸、服部

△伊吹山スキー練習

2月4日

リーダー広田、西村外8名

△伊吹山スキー練習

2月18日

リーダー高橋、室、日置、南谷外4名

△石徹白高原スキーツアー

3月3日~5日

リーダー室、森内、南谷

◆松阪山岳会

△伊吹スキー行

2月13日~14日

近藤貞雄、山口政一、萩原正三、都留氏、西川潔、長沢孝一、野呂昭二、水本成秋、飯田綾子、長井節子、宇佐美摂子、増田恭子、西川健一郎、松山見也、大西英夫、萩原哲哉、山田善春、茶兄弟

△錫杖岳

2月21日

リーダー北出富太郎、近藤貞雄

△羅足山 仙ヶ岳縦走

3月7日

リーダー大西保夫、杉山幸雄

△矢頭山

3月16日

芦田潔

△綿向山

3月19日

伊藤潮治

△鳳凰山

4月30日~5月3日

長沢孝一

△北股、池木屋山

5月1日~5日

伊藤潮治外1名

△藤内壁、国見岳

5月1日~3日

リーダー芦田潔、芦田節子

△雙門溪、彌山

5月16日~19日

リーダー杉山幸雄、堀山庄次、井下博太

△相鹿瀬峠、五柱山

5月23日

リーダー山口政一、中島修一

△飯福田山、堀坂峠

7月11日

リーダー大西保夫、山口政一、西川潔、長沢孝一、西川益生、橋爪敏、野口昭二、水本成秋、大西和夫、山口隆田、飯田綾子、佐伯治子、前田真子、山口さくら、山口博也、藤原

△大雪山

7月21日~8月1日

大西保夫、西川潔

△立山、鍋岳、黒部谷

7月23日~28日

リーダー山口政一、西井良一、橋爪敏、野口昭二、水本成秋、奥井宗夫

△常念岳、大天井岳、猿岳縦走

7月23日~26日

リーダー長沢孝一、萩原正三、松山見也、北村守彦、高瀬英雄、西川順司、柳原幸二、前川稲枝、山本靖子、宇佐美摂子、津坂あや、一木伸子、浦畑節子、45名

△藤内壁

8月14~16日

リーダー芦田潔、和田順一、芦田節子45名

△聖岳、赤石岳、荒川岳縦走

8月21日~27日

芦田潔

△瀨沢合宿、北尾根、ジャングルム、南枝

8月27日~9月1日

長沢孝一、齋谷和、井阪安弘、田原謙次郎

村坂光郎

△赤目溪谷

9月12日

リーダー西川潔、林みづ子、西川英郎

△茨川、藤原岳(高体連体育大会)

9月24日~26日

長坂孝一、山口政一、西川潔、橋爪敏

△堀坂山、観音岳、飯福田山(4体)

10月16日~17日

大西保夫、山口政一、西川潔、橋爪敏、浅山千太郎、萩原正三、中島修一、中西初太郎、長沢孝一

△岩登講習会

11月13日~14日

長沢孝一

◆松阪高校山岳部

△久苗尊山

4月3日~4日

参加人員 男3名 女1外3名

△鈴蘭山

5月23日

萩原先生、男生2名、女2名

△常念岳、大天井岳、縦走

7月23日~27日

萩原先生、男生5名、女生2名、外5名

△宇賀溪、藤原岳(内連体育大会)

9月24日~2

リーダー西井良一、男生6名

△堀坂山、観音岳、飯福田山(県体)

10月16日、17日

リーダー西井良一、男生6名

◆名張高岳部

△尾ヶ

4月、26日

△久

6月5日

△白馬岳、針木岳縦走

7月28日~8月1日

△宇賀溪、藤原岳

9月24日~26日

△観音岳、堀坂山、飯福田山

10月16日~17日

△岩登講習会(於藤内壁)

11月13日~14日

◆三重県立医科大学山岳部

△大杉谷遊行

5月2日~5日

林、竹内、山岡

△御在所岳前尾根

5月22日~23日

吉本、成瀬、林、竹内、山岡

△白根三山縦走

5月28日~6月6日

細井、野々山

△鎌ヶ岳

6月

吉本

△御在所岳前尾根

7月4日

林、竹内、山岡、野村

△藤内壁、一ノ壁、中又、ソルム、前尾根

7月18日~19日

吉本、林、竹内、山岡、小島

△御在所岳、根ノ平峠

7月20日

林、山岡、竹内、小島

△後立山縦走

8月1日~8日

野々山、林、山岡、竹内  
 △釈迦岳  
 8月  
 吉本  
 △面樽高岳、奥又白谷  
 8月  
 吉本45名  
 △藤内壁、マイナス滝、ツルム正面、前尾根  
 9月22日~23日  
 竹内、山岡、吉本  
 △木曾駒ヶ岳  
 9月  
 吉本  
 △愛知川  
 9月  
 吉本

△槍ヶ岳、屏風岩、洞沢、徳本峠  
 10月9日~15日  
 林、竹内、山岡  
 △愛知川、根平峠、永源寺  
 10月28日~13日  
 杉本、稲、清瀬、岡田、砂川、野々山  
 △木曾駒ヶ岳  
 10月  
 吉本  
 △雨乞岳  
 12月  
 吉本、成瀬  
 △木曾駒ヶ岳  
 12月27日~1月1日  
 吉本、成瀬、野々山

三重県山岳連盟報告

— 第六号 —

昭和30年7月25日印刷  
昭和30年8月1日発行

発行所 三重県山岳連盟事務所

兼務 鈴鹿市下箕田町  
 発行人 伊 達 忠 雄

印刷所 鈴鹿市中箕田町70  
 杉 野 藤 工 房  
 TEL 伊2神戸457